

湘南里川づくり地域共生プロジェクト ——ふるさとの川を次世代に継承する：2013年度概要——

藤野裕弘*・二宮 洋*・河野孝博*・藤吉正明*・室田憲一*

1. はじめに

人類社会の持続的存続には、環境問題を広い視野から考え、問題の解決に向けて行動できる人材の育成が必要である。その様な人材育成には、人文・社会・自然科学の垣根を越えた学際的で実践的な教育プログラムの構築が極めて重要となる。その中でも実践的な環境教育への期待は大きく、2000年には国連における日本主導の「持続可能な開発のための教育の10年」がスタートし¹⁾、日本では環境教育の推進を目的とした「環境保全活動・環境教育推進法」が2003年に成立した²⁾。

東海大学では、環境分野における文理融合型の人材育成および研究の向上を図り、その成果を、地域・社会に還元することを目的の一つとした環境憲章を1997年に発表している³⁾。また、教養学部では、広い視野を持った人材を育成するため、学部共通科目を段階的に履修させ、実践系科目に結び付ける学部共通領域を構築している。さらに、教養学部人間環境学科では、自然科学系と人文・社会科学系カリキュラムを融合させた人間環境領域（総合環境科学系）を設けている^{4, 5)}。人間環境領域では、人間環境に関わる様々な問題を、人文・社会・自然科学の枠にとらわれない広い視野から考え、問題解決に向けて行動できる人材の育成を目的に、実践的な環境教育プログラムが用意されている^{4, 5)}。この特徴的な環境教育プログラムは、2011年度の日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育委員会21期提言の中で引用されるに至っている⁶⁾。こうした背景のもと、我々は、様々な体験型環境教育プログラムを実施してきた⁷⁻³⁴⁾。

今回は、教養学部共通実践科目である人間学2「湘南里川づくり地域共生プロジェクト」の2013年度実施概要について報告する。

2. 目的及び実施概要

「湘南里川づくり」は、湘南地域のふるさとの川である金目川水系流域の自然や文化、くらしを地域の貴重な財産として次世代を担う子どもたちに引き継いでいくために、市民（湘南里

受理日2014年11月26日

*教養学部

川見守り隊)と行政の協働により河川等の保全・活用に取り組む活動のことである。本プロジェクトは、流域団体の活動をネットワーク化し、「湘南里川づくり」を流域全体に広めるこの活動と連携する。学生は、それら流域団体の連携を図る目的で実施する「湘南里川づくりフォーラム」に企画段階から参加し、実際にフォーラムの運営に携わる。

具体的には、履修学生が、「湘南里川フォーラム2014」の企画・運営に参加する。学生は、湘南里川づくりみんなの会のフォーラム担当幹事と複数回の企画打合せを行い、表1の実施計画概要を取りまとめた。その後、担当割に従い準備を進め、2月2日にフォーラムを実施した。

表1 湘南里川フォーラム2014実施概要

開催日	：2014年2月2日(日)
開始時間	：10:30開会式(10:00開場)～16:00閉会
開催場所	：東海大学湘南校舎13号館13-201教室
(プログラム)	
10:00	開場(13-201教室)
10:30	開会式
10:40	基調講演
	テーマ「里川を目指して」
	島谷 幸宏氏(九州大学大学院 工学研究院 環境社会部門 教授)
	テーマ：「里川らしさ」を示す客観的指標とは
	篠宮 英介(東海大学大学院 人間環境学研究科)
	1名未定、篠宮英介(大学院人間環境学研究科1年)
12:00	昼食休憩
13:00	分科会プログラム
	①地区特性から考える里川らしさ
	②里川づくりに向けた活動(会員報告)
	③流域全体で取り組む里川教育
16:00	閉会

3. 結果と今後

一般の参加者は100名を超える状況であった。午前の基調講演は島谷幸宏氏(九州大学大学院工学研究院環境社会部門教授)と篠宮英介氏(東海大学大学院 人間環境学研究科院生)が担当したが、その内容は基調講演概要にまとめた。午後の分科会は、学生がそれぞれ担当した。その内容は、分科会概要1～3にまとめた。当日は、参加者のうち、62名からアンケートを回収した。その集計結果の一部は、表2にまとめた。

なお、昨年度の課題の一つであった「学生の授業スケジュールと湘南里川づくりみんなの会の担当者との打合せスケジュールの調整」については、担当教員藤野と里川づくり事務局との間でメールを活用することにより、昨年度より改善することができた。しかしながら、直接打ち合わせを行う場合には、スケジュール調整が難しく、課題は残されたままになっている。

4. 基調講演概要

「里川を目指して」

島谷幸宏氏（九州大学大学院 工学研究院 環境社会部門 教授）

今回は、湘南里川フォーラムの発足以降、初となる外部講師を招聘した。講演を引き受けていただいた島谷教授は、1980年に九州大学大学院工学研究科修士課程を修了し、同年に建設省に入省、1993年には建設省土木研究所河川環境研究室長に就任されている。その後、2001年に国土交通省九州整備局武雄工事事務所の所長、2003年に現職となっている。研究内容は、「住民参加の川づくり」、「多自然川づくり」、「トキの野生復帰」、「川の風景デザイン」、「流域全体での治水」などがテーマで、研究実践活動を展開されている。

講演では「川づくりとは何か？」や「川とは何か？」といった基礎的内容から、島谷教授が実際に取り組んでこられた、住民参加の川づくりの具体的な事例紹介などが行われた。

講演後の質疑応答では、金目川の水害対策の質問などがあった。金目川水系流域では2013年4月と9月頃の2度にわたって、集中豪雨に見舞われ、堤防などの決壊が各所で見られたことから、住民の危険意識が高まっている現状にある。金目川水系の河川が流れる3市（秦野市・伊勢原市・平塚市）では、水害対策として、避難ルートなどが示されている洪水ハザードマップが作成されているが、島谷教授からは、さらに市単位でのハザードマップだけではなく、詳細な地域単位でのハザードマップを作成していくことの重要性が述べられた。

「里川らしさを示す客観的指標とは」

篠宮英介（東海大学大学院人間環境学研究科藤野研究室修士1年）

東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程の藤野研究室では河川をフィールドとして、学生が環境保全に向けた様々な研究に取り組んでいる。今回のフォーラムでは、大学院1年生の篠宮氏が「里川度」という流域環境評価尺度の検討についての研究報告を行った。

里川度は、流域の自然環境を評価する自然度と、流域の文化・歴史を踏まえた生活環境を評価する生活度の2つから、流域の現状を把握していくための評価となっている。最終的には、里川度を確立することで流域住民同士が「金目川水系の里川らしさ」に対して、最低限の共通した認識を持つ手段として活用されていくことを目指している。

5. 分科会概要

分科会①「地区特性から考える里川らしさ」

担当コーディネーター 松本晃一・篠宮英介

本分科会では、湘南里川づくりが掲げる6つの地域区分に沿った形で、特に3つの地域『水源流域地区』、『市街化地区』、『農業地区』に関して、その地区特性から里川らしさを参加者を含めて討論し、里川らしさを考えて見ようという試みを実施した。

篠宮が全体会にて報告した『生活度』という尺度においては、湘南里川づくりみんなの会の個人会員、NPO 法人東海大学地域環境ネットワークの協力により、市民の意見も参考に作成してきた。しかしながら、より多くの地域住民の生の声を参考にすることがあるため、本分科会の議論にて要因を抽出し、それぞれの『地域の里川らしさ』について意見交換することも大きな目的の一つであった。

非常に広い話題であり、特に『里川』という単語そのものに明確な定義づけがされていないことも相まって、参加者からの意見がかなり分かると想定し、あらかじめ、マップと個人会員からの情報提供を用意した。

1つ目は『金目川水系里川イメージマップ』である。『水源流域地区』、『市街化地区』、『農業地区』の3つの地域区分が記載されておりそれらの地区においての『里川らしさ』を参加者が自由に記載できるようにしたものである。

2つ目は湘南里川づくりみんなの会の中で特定の団体に所属されていない『個人会員』の方々が集まり、金目川水系全体を実際に歩き自分の目で確認する『見守りウォーキング』という活動の中で、感じたことを話題提供として発表してもらった。この発表から感じたことや、聞きながら思い出したことなどもイメージマップに記載するようにお願いした。

参加者からは『水源地区は自然が多く自分が思い描く里川である』という意見も聞かれたが、『よし、行くぞ』と身構えて行くような場所が多い水源地区は親しみのある里川像とは異なるという意見の方が多く聞かれた。逆に、市街化地区においては、きれいなイメージも里川のイメージもあまりわからないという意見が多く、市街化地区での里川のイメージの抽出は困難を極める結果となった。また、農業地区においては、流域内で田畑が多く、身近である上に、自然も感じられるところから里川のイメージとして浮かぶ意見が多かった。

上記議論から、各個人が思い描く里川のイメージ像があまりに多様であることがわかった。九州大学島谷教授から「金目川水系は全国的に見てもかなり多様な環境を持ち合わせている。水系の統一された里川のイメージを持たせることは難しいのではないか。」というアドバイスがあった。加えて、湘南里川づくりのビジョンの作成者の中心であった湘南里川作りみんなの会藤野会長から「6つの地域区分は当時、あくまでも指針として暫定的に定めたものであるため、十分な検討はこれからである」というコメントがあった。

このことから、金目川水系における里川らしさを検討するうえでまず、再度、里川らしさを構築するためのビジョン及び地域の分けを検討し、より細分化することが『金目川水系における里川らしさ』を構築する上で重要な事項であると結論付けられた。

分科会②「里川づくりに向けた活動（会員報告）」報告

担当コーディネーター 細川克彦氏 手塚真理

「鶴巻ホタルの会」発表 後藤文彦氏

善波川・大根川が合流する河川および田園地帯で行われている地域活動について報告があった。両河川が流れる鶴巻・大根地区は秦野市の中で最も広大な田園地帯で、住民がこののどかな自然を楽しみながら土手沿いを散策したり、子ども達がホタルの住む田んぼで田植えや稲刈

りを体験したりすることができるよう、地域の団体が分担して様々な活動に取り組んでいる様子が紹介された。「鶴巻ホタルの会」は水田の管理やホタルの育成、子ども達の田植え・稲刈り体験を行っている。「鶴巻あじさい散歩道美化の会」「善波川あじさいロードの会」(上部団体として、田園環境を育む会がある)「大根川あじさいの会」「鶴巻親水遊歩道の会」の4つの団体は、場所ごとに分担してアジサイの植栽管理、河川の清掃や草刈りを行っている。あじさい散歩道では毎年一回「アジサイ鑑遊会」を開催し、地域住民と共に川沿いの花々を楽しんでいる。また、去年はホタルの田んぼや善波川でホタルが飛び、活動の成果が見られた。

「くずはの家 えのきの会」 発表 木嶋義光氏

秦野市くずはの家を拠点に自然観察指導を行っている「くずはの家 えのきの会」の中でも、川の自然を対象としている「水辺分科会」の活動について報告があった。水辺分科会では、子ども達が自分で捕まえて実物に触れ、観察するといった実体験を重視した観察会を行っている。くずはの家の月例観察会だけでなく、環境保全課の生き物観察会に協力したり、秦野市のエコスクール事業で学校の近くの川で生き物観察会をするなど、子ども達が川の自然を楽しみ、正しく理解できるようになるための活動をしている。また、葛葉川の生き物リストづくりを目指した定期的な調査を行ったり、県や環境省の市民参加型の調査に積極的に参加し、データを提供したりしている。秦野市民の日には湘南里川づくり見守り隊としてミニ水族館を出店した。

「湘南里川づくりみんなの会 個人会員」 発表 上田秀一氏、原博雄氏

個人会員の皆さんが行っている定期的な交流会について報告があった。交流会では、水質や外来生物、河川工事など興味ある分野について専門の先生をお呼びし、川についての知識を深めている。また、毎月「湘南里川見守りウォーク」として金目川水系をすべて歩きつくすことを目標に、川歩きを継続している。川の水質調査を行っている東海大学の学生や卒業生が同行し、データを紹介していただくこともある。3市のお祭りの際には、市民の川に対する意識調査を行った。その分析結果によると、年齢が高いほど川を訪れる頻度が高いこと、好きな川のイメージが年齢によって変わること、川の清掃活動の広報によって、清掃活動に参加する人が増える可能性があることなどがわかった。

「河内川あじさいの会」 展示発表 石井会長

ポスター展示のみでしたが、石井会長より活動についての紹介があった。「河内川あじさいの会」では、アジサイの植栽や定期的な清掃活動を行っている。また毎年6月には、河内川あじさい祭りをを行い、多くの市民が訪れている。また、10月には「河内川生き物しらべ」を行っている。

(意見交換)

◎里川づくりの活動を行うに際し、相模川や酒匂川のような水源税による補助がなく予算的な援助がないが、行政との接点をどのように持っていったらよいのか。

●河内川あじさいの会の活動のように、運営資金は会費だけのボランティア団体でも川の水質を改善したり子どもが川で遊べる川にするための提言を行政(県や市)に行い、予算化してもらうことが出来た。

●流域住民が地域にふさわしい川のあり方を行政に発信し、行政には川の管理に関する情報

を提供してもらい、里川づくりのしくみの中で協働という形で調整していく。

◎里川づくりの立ち上げから数年たつが明確な地域ごとの目標がない。川の欠点を見つけそれを改善する活動を行うなどの方向性が必要ではないか。

●湘南里川づくりの活動では地域ごとに目指す川の姿をビジョンということで定めているので、地域の住民がビジョンを目標に活動してほしい。ビジョンが見守り隊に浸透していない。

●里川づくりはまだ動き出したばかりなので明確な目標を徐々に設定していけばよい

●見守り隊のネットワークをもっと深めていく必要がある

●子ども達の親も川遊びをしない世代になってしまったので、若い人達に川を知ってもらうことが必要である。

◎湘南里川づくり推進のための基本的な考え方に照らし合わせ、チェックリストのように川を評価していったらどうか。

(まとめ)

見守り隊の団体や個人は、それぞれ様々な切り口で川を保全したり、より多くの地域住民に川に親しんでもらうための活動をしている。意見交換では、地域にとって川のよりよい姿（ビジョン）や課題を明確にし、それを実現するために会員がビジョンを共有し、里川づくりのネットワークを通じて行政と連携を取りながら共に活動していくことができれば、よりよい里川づくりにつながるという意見が多く聞かれた。

分科会③「流域一体で行う里川教育」

清水大貴氏（東海大学人間環境学研究科）

竹川航希氏（東海大学人間環境学部人間環境学科自然環境課程）

池添太一氏（東海大学人間環境学部人間環境学科自然環境課程）

本田裕子氏（東海大学人間環境学部人間環境学科自然環境課程）

(ポスター展示参加団体) 湘南里川づくりみんなの会（柳川三郎氏）

東海大学人間環境学研究科人間環境学専攻 藤野研究室

東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程藤野研究室

学生発表（里川の文化的価値を利用した意識啓発方法の提案、金目川生き物観察会の提案）を行った後、意見交換を行った。

（里川の文化的価値を利用した意識啓発）

里川は地域の自然の他に、その流域の人々の生活や文化、歴史など、自然と人によって作られてきた環境である。そのため里川づくりを推進することは、その流域（地域）を守ることに繋がる。発表では、末長く活動を継続し、里川の価値を次世代に引き継ぐためには、流域住民が主導で里川づくりを行う必要性が述べられた。流域住民の主体性を促すためには、「地域のために活動したい」という意識を芽生えさせることが不可欠である。その方法として、里川の文化的価値である「景観」に価値を見出してもらうことで、その地域や川に対する愛着や郷土愛が生まれ、住民の主体性を生み、里川保全活動参加が期待できるという提案がなされた。

(金目川生き物観察会)

里川教育に必要な要素として重要なことは、子供たちの里川に対する親しみやイメージを育て、次世代の自発的な行動につなげることである。実際に自分たちが所属する研究室で行われた生き物観察会を例に挙げ、生き物観察会の効果や必要性について発表した。しかしながら、多くの生き物観察会は扱う素材が似ており、単発的であることが多いため、活動の工夫が必要である。生き物のモニタリング方法の導入や、河原の昆虫や植物にも着目するなどの体験活動の新たな形を提案した。

(意見交換)

- 子どもたちの教育について（次世代が里川をどのように受け止めるか）
- 大人に対する教育方法について
- 住民を先導する人の必要性、育成方法について
- 住民参加の重要性について（参加を促すためにはどうしたらよいか）
- 川に対するプラスイメージを養う必要性について
- 子供たちの体験の機会を増やしていく方法について
- 安全管理について
- 景観などを用いた意識啓発について
- 水環境を総合的に考える必要性について（山・川・海など）

(まとめ)

具体的な活動案等をまとめるには至らなかったが、今後の活動につながる意見交換を行うことができた。また、金目川水系で活動を行っている流域住民の方々が集い、意見交換を行うことは重要かつ貴重である。ここでの意見や案を活かし、新たな活動を行いたいという声もあった。

表2 「湘南里川づくりフォーラム2014」アンケート結果

(アンケート回答者：62名)

住まい	区分	回答数	%
	平塚市	22	35
	秦野市	21	34
	伊勢原市	6	10
	その他	9	15
	無回答	4	6

年代	区分	回答数	%
	10代未満	0	0
	10代	0	0
	20代	1	2
	30代	1	2
	40代	5	8
	50代	6	10
	60代	29	46
	70代	20	32
	無回答	0	0

職業	区分	回答数	%
	会社員・公務員	14	22
	自営業・自由業	6	10
	主婦・主夫	11	18
	児童・生徒・学生	1	2
	無職	21	34
	その他	7	11
	無回答	2	3

性別	区分	回答数	%
	男性	44	71
	女性	15	24
	無回答	3	5

今回のイベントを何で知ったか？（複数回答可）

選択肢	回答数
公民館掲示のポスター、チラシ	11
知人や家族のお誘い	13
県のたより	6
市の広報誌	6
その他	27

今回のフォーラムに参加した理由（複数回答可）

選択肢	回答数
湘南里川づくりに興味をもったから	31
地域の自然や環境に興味があったから	38
知人や家族に誘われて	5
開催場所が参加しやすい場所だったら	6
その他	11

今回のフォーラムの感想		印象に残ったものは？（複数回答可）	
選択肢	回答数	選択肢	回答数
よかった	51	基調講演	43
ふつう	6	意見交換会	12
よくなかった	0	分科会①	10
（自由記載） 島谷先生・藤野先生、院生の話が良かった（身近な問題をわかり易く話していた、詳細な資料がよい、参考になる）。川を守る部分を明確にして、まわりをまき込み活動していく。 金目川水系の価値を再認識できた。 講演後の質問が長いので、手立てが必要である。 行政側も招いて現状を説明してもらおうとよい。 総合的な視点をもてた。 住民参加の川の整備が必要だと思った。 今後の活動のためのヒントが得られた。 活動に従事している人のお話の内容が良かった。 自然を壊さずに自然と一緒に（共存）に災害を防いでいく様々な方法を皆で考えていきたい。 学問的調査研究が参考になる。 地元の里川で知らないことがあった。 里川について、色々な活動がされていることと川と人、自然との関係について考えることができた。 現在、秦野市内のNPO 環境保全団体、地域ボランティア団体に参加しているが、本日の基調講演は環境保全活動における行政・市民・企業の共働及びネットワークの重要性を再確認でき、有意義でした。		分科会②	9
		分科会③	8
		ポスター展示	3
		印象に残った理由（自由記載）	
		みんなの川でありみんなで守っていくことが大切 昔から次の世代につなぐためにも子供たちを活動にまき込んでいく。 いろんな交流をもてた。 ネットワークとして重要である。 分科会①で、島谷先生から、金目川の貴重さ・多様性及び希少価値を教えられたため今後の大根川の里川づくりに参考になった。 行政が関わる場所とそうでないところといろいろ有るが、自然を大切にということ強く主張し、もう少し予算化して自分達だけでなく行政も巻き込んでほしい。 島谷教授の講演は実践に基づくものでこれからのあり方を指している。 私は、くずはの家、えのきの会、ステップアップ講座としての参加でしたが「良かった」のひとことです。 会場が3ヶ所にわたるため、自分が関係する会場以外は参加できなかったが、報告開始前にポスターにて、それぞれの活動の概要がわかり参考になった。	

成果の公表

「湘南里川フォーラム2014」の実施そのものが成果の発表の場であるが、その他に「湘南里川づくりみんなの会」のホームページに掲載されている。

< http://www.satokawa.com/koremade/koremade_20110917.html >

なお、神奈川県ホームページに、この里川ホームページへの公式リンクサイトが設定されている。

謝辞

この教育研究の一部は、2013年度の教育研究補助金により実施された。関係各位並びに参加学生に、感謝申し上げます。

参考文献

- 1) ESD - J 特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議
<http://www.esd-j.org/>
- 2) 環境省総合環境政策局環境教育推進室, 環境教育・環境学習, 環境保全活動
<http://www.env.go.jp/policy/edu/>
- 3) 東海大学環境憲章 <http://www.u-tokai.ac.jp/ems/kankyokensyo.htm>
- 4) 藤野裕弘・内田晴久・松澤宏・小林一夫:「企業のCSR活動と連携した実践系授業の展開(1) - CSRと大学院授業との連携-」. 2010年度日本環境教育学会第21回大会研究発表要旨集, pp. 156 (2010).
- 5) 藤野裕弘:「地域社会と連携した体験型環境教育の試み～東海大学の実践例～」. 私立大学環境保全協議会会誌, 第15号, 19-24 (2012).
- 6) 日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育委員会21期提言:「高等教育における環境教育の充実に向けて」. 2011年9月22日.
- 7) 室田憲一・藤野裕弘 他: NPOと連携した体験学習型教育の試み. 2003年度日本環境学会第29回研究発表会講演要旨集, pp. 178 - 180 (2003).
- 8) 室田憲一・藤野裕弘 他: NPOと連携した体験学習型教育の試み. 東海大学紀要教養学部, 第34輯, 331 - 333 (2003).
- 9) NPO法人自然塾丹沢ドン会編集: 名古屋の自然 - 丹沢の雑木林・棚田の復権と生き物たち, 夢工房, 神奈川, pp. 63 (2003).
- 10) 藤野裕弘・内田晴久 他: 環境NPOと連携した体験学習型環境教育の試み(1). 2004年度日本環境学会第30回研究発表会講演要旨集, pp. 84 - 85 (2004).
- 11) 室田憲一・藤野裕弘 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(1). 東海大学紀要教養学部, 第35輯, 271 - 276 (2004).
- 12) 室田憲一・藤野裕弘 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(2). 2005年度日本環境学会第31回研究発表会講演要旨集, pp. 240 - 243 (2005).
- 13) 室田憲一・藤吉正明 他: 環境NPOと連携した体験学習型教育の試み - 農業体験事例報告 -. 東海大学紀要教養学部, 第36輯, 1 - 11 (2005).
- 14) 北野忠・藤野裕弘 他: 地域社会と連携した体験型環境教育の試み～SPPを利用した具体的取り組み例～. 東海大学紀要教養学部, 第36輯, 13 - 21 (2005).
- 15) 藤野裕弘・内田晴久 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(2). 東海大学紀要教養学部, 第36輯, 249 - 255 (2005).
- 16) 北野忠・藤野裕弘 他: 地域社会と連携した体験型環境教育の試み～SPPを利用した具体的取り組み例～. 2006年度日本環境教育学会第17回研究発表会講演要旨集, pp. 146 (2006).
- 17) 藤野裕弘・藤吉正明 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(3). 東海大学紀要教養学部, 第37輯, 247 - 252 (2006).
- 18) 藤野裕弘・内田晴久 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(1) - 乗船体験実習 -. 2007年度日本環境教育学会第18回大会研究発表要旨集, pp. 65 (2007).

- 19) 室田憲一・藤吉正明 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（2）－農業体験実習－. 2007 年度日本環境教育学会第 18 回大会研究発表要旨集. pp. 66 (2007).
- 20) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（4）. 東海大学紀要教養学部. 第 38 輯. 271 - 278 (2007).
- 21) 内田晴久・藤野裕弘 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み（1）～初等中等教育との連携を中心に～. 東海大学紀要教養学部. 第 38 輯. 279 - 285 (2007).
- 22) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（5）. 東海大学紀要教養学部. 第 39 輯. 289 - 294 (2008).
- 23) 内田晴久・藤野裕弘 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み（2）～初等中等教育との連携を中心に～. 東海大学紀要教養学部. 第 39 輯. 295 - 301 (2008).
- 24) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（6）. 東海大学紀要教養学部. 第 40 輯. 365 - 370 (2009).
- 25) 内田晴久・藤野裕弘 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み（3）～初等中等教育（SSH）との連携を中心に～. 東海大学紀要教養学部. 第 40 輯. 371 - 377 (2009).
- 26) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（1）～. 東海大学紀要教養学部. 第 41 輯. 309 - 313 (2010).
- 27) 藤野裕弘・内田晴久他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO との連携を中心に（1）～. 東海大学紀要教養学部. 第 41 輯. 315 - 328 (2010).
- 28) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（2）～. 東海大学紀要教養学部. 第 42 輯. 297 - 304 (2011).
- 29) 藤野裕弘・内田晴久他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO との連携を中心に（2）～. 東海大学紀要教養学部. 第 42 輯. 305 - 312 (2011).
- 30) 藤野裕弘・青木靖・松澤宏：企業の CSR 活動と連携した実践系授業の展開（ISO14001 の活用）. 東海大学紀要教養学部. 第 43 輯. 15 - 22 (2012).
- 31) 藤野裕弘・内田晴久他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO との連携を中心に（3）～. 東海大学紀要教養学部. 第 43 輯. 329 - 339 (2012).
- 32) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（3）～. 東海大学紀要教養学部. 第 43 輯. 341 - 349 (2012).
- 33) 藤野裕弘・内田晴久他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO との連携を中心に（4）～. 東海大学紀要教養学部. 第 44 輯. 269 - 278 (2013).
- 34) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（4）～. 東海大学紀要教養学部. 第 44 輯. 279 - 284 (2013).



図1 基調講演「里川を目指して」島谷幸宏教授

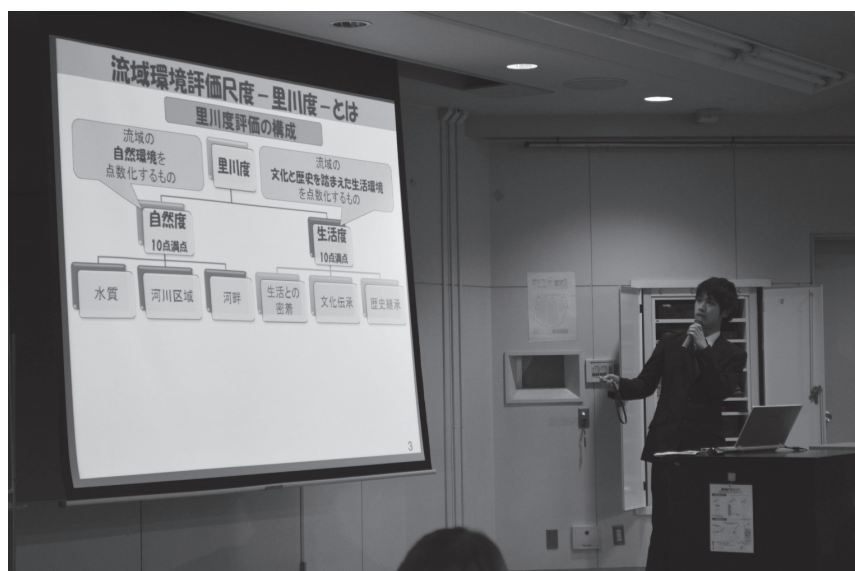


図2 基調講演「里川らしさを示す客観的指標とは」篠宮英介氏

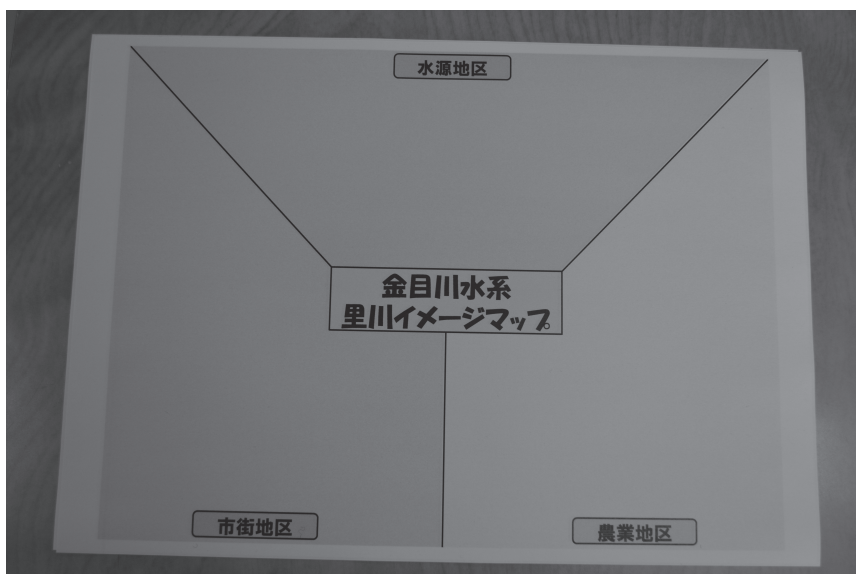


図3 分科会①「地区特性から考える里川らしさ」使用イメージマップ



図4 分科会①「地区特性から考える里川らしさ」個人会員発表風景



図5 分科会①「地区特性から考える里川らしさ」討論風景



図6 分科会②「里川づくりに向けた活動」鶴巻ホタルの会活動風景



図7 分科会②「里川づくりに向けた活動」くずはの家えのきの会活動風景

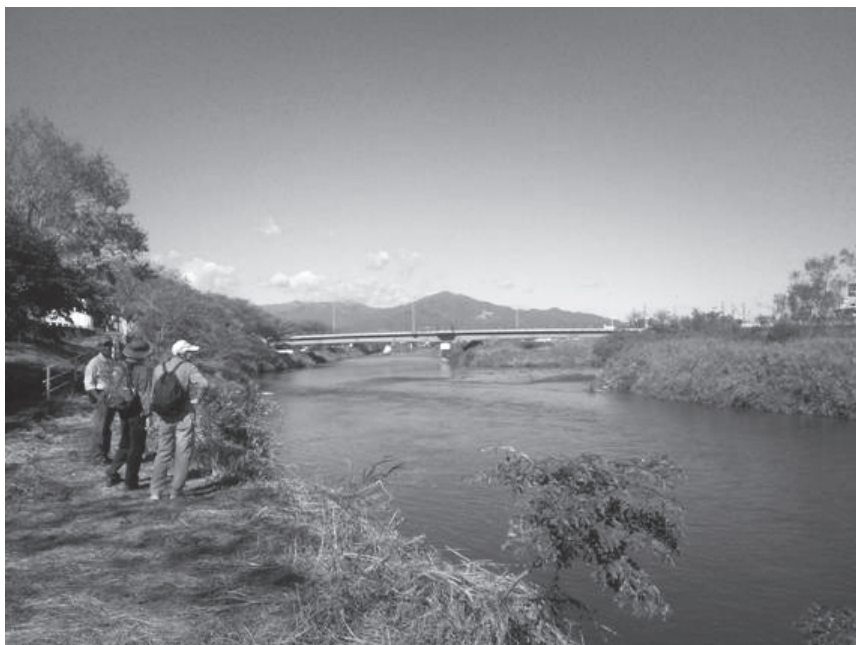


図8 分科会②「里川づくりに向けた活動」湘南里川づくりみんなの会個人会員活動風景



図9 分科会③「流域一体で行う里川教育」討論風景

